

『日本浪漫派』と『人民文庫』

河 内 光 治

【要 旨】 昭和十年から十三年にかけての日本文学は、大きな転回点に立っていた。昭和八年に唱えられた「文芸復興」が結実を見ないまま分極化し、やがて国策に沿った「文壇新体制」に移って行く、その時期である。謂うまでもなく、昭和十一年二月二十六日の青年将校によるクーデター未遂事件、昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件から突入した「支那事变」の軍事的侵寇の時期が背景である。それをこの時期を代表する二つの雑誌、「日本浪漫派」と「人民文庫」の足跡を辿りながら明らかにするのが本稿の目的である。則ち、前号の「私小説論」考と併せ、「文学界」を中心に、その右に「日本浪漫派」、左に「人民文庫」という図式がその基本姿勢である。

一

『日本浪漫派』の創刊号は昭和十年の三月号であり、終刊号は昭和十三年の八月号である。三年五カ月の期間に合計二十九冊が刊行されている。年次別に見れば、昭和十年には一号から九号までの九冊（九月号が休刊）、昭和十一年には十号から十九号までの十冊（五月号と七月号が休刊）、昭和十二年には二十号から二十六号までの七冊（二月号、六月号、十月号、十一月号、十二月号が休刊）、そして昭和十三年には三冊で、一月号、三月号の後、八月号で終刊となっている。発行所は一号から二十三号（十二年五月号）までが武蔵野書院である

『日本浪漫派』と『人民文庫』（河内光治）

が、二十四号（十二年七月号）以降は西東書林になっている。編輯所は、一号の末尾に亀井勝一郎方に置き「雑誌に関する事務一切は編輯所で取扱う」と書かれてあるが、五号（十年七月号）から淀野隆三方に変わり、更に十三号（十一月四月号）から清山荘になり、十七号（十一年十月号）から再び亀井方となり、その号の「編輯後記」の中で中谷孝雄が「今月から編輯の仕事は亀井がすることになった。雑誌に関する用件は一切亀井方に御願いする。」と書いている。十七号までの「編輯後記」の執筆者は、一号がKと無署名名の二つ、二号がK、三・四・八号が中谷、五・十号が亀井、六・九号が淀野、七号が山岸外史、十一号から十七号までが中谷（十六号は保田与重郎であるが何

も書いていない)、そして亀井が十八号から二十六号までを書き、二十九号(十三年一月号)から編輯所は外村繁方(はらむら)に変わり、後記も外村が書いています。

『人民文庫』の創刊号は昭和十一年の三月号であり、終刊号は昭和十三年の一月号である。一年十一カ月の期間に合計二十六冊が刊行されている。それは毎月の普通号のほかに、昭和十二年の一月と十月に別冊の『現代代表作全集』、九月号が発売禁止処分を受けたので九月臨時号を出したためである。発行所は人民社であり、編輯発行人は本庄陸男(りくお)である。

この二つの雑誌について、『近代文学』同人が編集執筆し、昭和十四年七月に河出書房から刊行された『現代日本文学辞典』の「人民文庫」の項で平野謙が「一見対蹠的な性格をもつ『人民文庫』と『日本浪漫派』とは、ナルプ解散、転向文学の氾濫という文学的地盤から芽ばえた異母兄弟とも言えよう。」と書き、その時は「ひどいことを言う」と憤然とした高見順が、昭和二十九年に行われた『近代文学』の座談会の席上で、この二つの雑誌は「転向という一本の木から出た二つの枝だ」と発言し、「平野謙説が正しいことに思い当たったのである。」と書いて以来、広く行われる見方となっている。尤も、高見はその前、昭和二十六年六月号の『世界』に書いた「倫理的意識の日本的歪曲」の中で、

当時の私たちは日に日に強まるファシヨ的傾向に対して、でき

るだけ抵抗を企てるという心構えだったが、しかし今から顧ると、それは逃げ腰の抵抗でもあった。『日本浪漫派』を私たちは反動と糾弾し、自分たちを反動でないとした。しかし、『日本浪漫派』と『人民文庫』とは、転向のふたつの現われだったとも今は考えられる。一本の木から出た二つの枝とせねばならぬのではないかと私は思う。だからと言って、私たちの仲間の心に燃えていた抵抗精神を否定することも、あやまりであろが。

と書いている。そして『日本浪漫派』の主張の中で、「美に対する反省、「健全な倫理的意識」の把握を彼等が日本文学にもとめた」のは「正しい部分」であったのだが、当時の自分達はそれを見ようとしなかったと回顧している。

平野の見方は戦後いち早く「小林多喜二と火野葦平とを表裏一体と眺め得るような成熟した文学的肉眼こそ、混沌たる現在の文学界には必要なのだ。」と書いた時以来の昭和文学史観に基づくものであるが、『文学界』の右に『日本浪漫派』を左に『人民文庫』を配置する昭和十年から十三年にかけての日本文学の見取図は、昭和九年二月のナルプ解体声明を一つの基軸に置いているものである。その点から言えば、昭和八年十月創刊の『文学界』はもとより、同年六月の『文化集団』、九月の『日曆』、十月の『行動』、昭和九年三月の『文学評論』、四月の『現実』にも同じように眼を配らなければならない。平野説を私流に敷衍すれば、大正末期の新感覚派とプロレタリア文学、昭和初

期の新興芸術派とマルクス主義文学、この二つの流れの再編成が昭和十年前後に行われ、それを代表するものが、『日本浪漫派』と『人民文庫』であった、ということになる。

二

『日本浪漫派』の創刊号の末尾に三月一日付の「創刊之辞」が載っている。保田調の美文であるが、途中を一部引用する。

近頃文学界の慣習を観るに、芸術と称し文学を唱えて、乃ち文芸を巧偽輕薄の方便とし俗知醜惡の手段とす、伎芸の高踏に処らず美神の峻烈を隔るもの寡しとせぬ。時に方って、僕ら浪漫派を号え、芸術の尊重を提げ、詩的精神の高唱を説き、芸術人的根性の顯揚を述ぶ。最近周囲環境に翻り顧みるに、頗る美を生命とし、切に文学を主旨とせんとする、芸術自覺の潑刺たる宣言の萌芽若干見ゆ。文学は今にして新しき不滅の開花に向わんとするか。

僕ら時代の青春の高き調べを掲げ、流行低俗の文学の排除に、芸術人の高邁不羈の行為の揚言に、退きて他を顧みず自身進んで身を挺した。既に聞く、詩とは原始にあり、語源に於て、虚空に精神の夢を築く営みの謂である。虚空に声を聴くもの、現世悉皆の榮耀に動ぜず、専ら精神の不朽の激烈に耐う、即ち天賦無償の職責に憑かるゝものに他ならぬ。

「日本浪漫派」と「人民文庫」(河内光治)

かくて「前代未だ知らざる切迫の極点」に「僕ら文学に心を同くする青年和して」新文学を唱えるものである、とするのである。これより約半年前、『コギト』⁽⁴⁾誌上に昭和九年十一月号から翌年一月号まで「日本浪漫派発刊の広告」が掲げられて、運動の火蓋は切られている。広告の趣旨も「創刊之辞」と同じである。即ち、「平俗低徊の文学が流行している」が、この流行に挑戦して日本浪漫派を創る。「日本浪漫派は悉く総てに秀でて至上に清らかに美しい存在である。今日の日本はかかる芸術人を要求し、大衆は彼らの要求の最も鋭い感受者を要請する。僕ら亦希求し憧憬する、最も高貴に激烈なものを。これは日本浪漫派の目標であり、現代である。」というのである。発起人として、神保光太郎、亀井勝一郎、中島栄次郎、中谷孝雄、緒方隆士、保田与重郎の六名が連署されてある。既に中堅作家と目されていた中谷を顧問格に、『コギト』の保田と第一次『現実』の亀井、『麵麴』の神保が集まったものと見ていい。亀井と神保は山形高校以来の友人である。創刊号の「六号雜記」欄の亀井の文章は次のように書き起こされている。

去年の秋、保田や神保と郊外を散歩しながら、ふと気づいた言葉が「日本浪漫派」という名称である。僕らはこの名称が大変気に入った。何をしようという具体的な計画はなかったが、この名称のうちに何かしら共通の感情のあるのを感じて、やがてその感情をはっきり探しあてようという仕事にとりかゝったのである。

保田も同人であった『現実』は、昭和九年八月の第五号をもって廃刊となつてゐるから、亀井が保田と新しい雑誌を作ろうとしたのは、『現実』の廃刊が直接影響してゐたと言つていいと思う。その『現実』の廃刊の理由は、最終号となつた第五号の「暑中お見舞を兼ねて」という編集部の声明の中で触れられていることから類推すれば、『現実』は解散したナルブを何等かの形で受け継いだものと見られて執筆者に迷惑を掛けたりしたので、廃刊せざるを得ないということであつたやうである。

『現実』の関係から妻の平林英子が連れて来て、保田と亀井が中谷の家に出入りするようになる。昭和九年十月の満年齢で、中谷が三十三歳、亀井が二十七歳、保田が二十四歳である。殊に大和桜井の豪農出身の保田と伊勢の農民出身である中谷とはうまが合つたらしい。ドイツ語を主とした教育を受けて来たことは亀井、神保を含めて四人に共通のことであつた。

その頃の私は当時流行のアメリカニズムというものと、いろいろなプロレタリア文学というものと、そのどちらにもあきたりないものを感じてゐた。こんなものを一掃してしまわないことは、日本の新文学は起らないと考えてゐた。そのこと自体に間違ひがあつたかも知らんが、当時の私はそう考えてゐた。そして、保田君もどうやらそれに賛成らしかった。⁽⁶⁾

と中谷は回想している。そして中谷は『コギト』に発表された保田の

作品に注目してゐたので、新しい雑誌を作ることで意見が一致し、亀井を誘つたと書かれてある。つまり中谷を後ろ楯として亀井を誘ひ、保田は彼の言う浪漫主義運動を拡大する方向で『日本浪漫派』を創刊したのである。創刊号の無署名の『編輯後記』は明らかに保田の文章であるが、その中で彼は、「僕らの運動も今までより潑刺となつて、主として『コギト』にのせてゐた日本浪漫派の主張も、こんどは二冊の雑誌で、ますます日本の浪漫派文学はさかんになるだろう。日本の浪漫派は生れた氣運でなく、先じて作られねばならぬ。」と誇らかに書いているのは、その辺の事情を語つてゐるものである。

保田と亀井の関係はどうかと言へば、昭和九年九月にナウカ社から刊行された亀井の第一評論集『転形期の文学』について保田は、『コギト』の十月号に一文を載せてゐるが、その中で「僕が亀井と親しく交わるにいたつたは、雑誌『現実』以後である。」としてゐる。そして現在の亀井について次のような意味ありげな言葉を連ねてゐる。

彼のいう良心も、次第に変化しつつある、彼の良心が変化したのではない、それは絶対にない、彼という芸術的良心の所在の仕方が変化してきたと僕には思われる。これは如何であらうか、という言葉は亀井にいう方がいゝのだ。僕はそこらに今後の君を考え、極めて人の悪い興味をもつてゐる。僕らのよるコギトの大体的な文学的意見を目前にして、この興味を君と測りたいと思つてゐるのだ。

『転形期の文学』については「いゝ本である」と書き、それは「亀井の文学的主張が僕らの現状に近しいとか、或いは又亀井の僕らを理解する友情のために」ではなく、この中には「本当の文学的なものだけを考えている」「本当の芸術家の気持が、語られている」からだとして、「祝辞」を述べている。そして亀井に「もっと今より無茶になる方がいゝ」と、「君の言う良心がますます多角的になること、これは芸術的現実告発の多角性をますますひろくとり出すこと、つまり錯乱しているときは錯乱のまゝ、この現実中からとり出すこと」を望んでいる。

謂わば、この保田と亀井の蜜月時代から『日本浪漫派』は始められたと言えよう。そして保田は『コギト』以来の一貫した文学的美学的立場を更に押し進め、亀井はそれまでの彼と同じように求道的時勢家として激しく揺れ動いて行く。

それにもう一人、林房雄について触れなければならぬ。前出の創刊号の「六号雑記」の続きで亀井は、

ロマンチズムというものを現代どのように確立するか。これは各人の生活や体験や世界観によってちがってくる。しかし、「高邁な精神」とか「激しい怒り」とか「高い孤独」とか、林房雄が獄中から伝えてくれる言葉は、おいそれと実現するわけにはいかぬ。まさにその反対と思われるような平凡な事実や苛酷な現実と執拗にとり組んで行かなければ、ロマンチズムの高い調べ

『日本浪漫派』と『人民文庫』（河内光治）

は到底手に入らない。

と書いているし、保田も同じ「六号雑記」の中で、

世間では林房雄氏と「日本浪漫派」の關係が気になってならぬそうだ。困った世間である。十月頃に出てくる林氏にきくといふ。すると大体わかるかもしれないが、僕にも今ではわからないのだ。林房雄という人は、少将にも中佐にもなれんが大将にはなれるような人らしい。（中略）僕ら日本浪漫派に示してくれた余りにも素直で無茶に近い好意さえ、世間ではとやかくいっている。（中略）僕は林房雄氏が元気でいて、それから浪漫派の放送をしてくれることを冀っている。

と書いている。林は『文学界』の編集を小林秀雄に託し、昭和九年十一月から静岡刑務所に服役中であつた。そして『中央公論』の昭和七年八月号から連載された林の「青年」が刊行されるや、保田は『文学評論』昭和九年六月号に「林房雄の「青年」について」を書き、亀井は『コギト』昭和九年七月号に「「青年」について」を書いて、賛辞と共感を寄せている。二人の発表雑誌が面白い。『文学評論』は昭和九年二月にナウカ社から出された雑誌で、武田麟太郎と林が編集相談役として参加していた。

林自身は、「日本浪漫派の運動そのものに対しては、傍流または応援団員のような立場にあつた」として、

理由の第一は「日本浪漫派」の活躍期には、前後併せて三年間

入獄していたこと、第二はそのころ既に「文学界」の同人であったこと。第二回目の入獄中（静岡刑務所）の手紙には、出たらずぐ「日本浪漫派」の同人になると何度か書いているが、出獄の翌日あたりに、小林秀雄君がわざわざ伊東まで来てくれて、「おまえがやめたら文学界はつぶれてしまう。浪漫派入りはやめろ」と一晩かかって口説かれ、「つぶれちゃ困るな。残るよ」ということになってしまった次第はどこかに書いた。⁽⁷⁾

と書かれてある。山岸外史も昭和十年十月号（七号）の「編輯後記」で「林房雄君が颯爽としてこの雑誌に入りそうに彼から発表もされ聞もされた訳だが文学界八月号の雑誌で、こんどは入らないことになった記事が小さく発表された。」と小林とのいきさつを伝えている。林は昭和十一年八月号（十五号）で同人参加が発表されている。因に林は『日本浪漫派』には昭和十二年七月号（二十四号）に「行かまほし杜甫の国」という詩一篇を載せているだけである。

このように『日本浪漫派』は同人六名によって創刊されたが、昭和九年十二月に創刊号を出した『青い花』が直ちに合流する。太宰治、檀一雄、山岸外史、木山捷平等である。中谷の『青空』以来の友人そして当時『世紀』で一緒だった淀野隆三、『コギト』の伊東静雄、芳賀壇等も加わり、第三号で発表された同人は二十二名になっている。

「その結合に於て、思を他に勞し慮を別に挟むもの一人といえどない。浪漫派は第三号をおくるに当り、いよいよ内外の形貌を堅くし

た。わが文学の光榮のためにこゝに未曾有の盛觀を見るべきである。」と中谷は「編輯後記」で書いている。亀井も七月号（五号）の「編輯後記」で「経営も大体見とおしがついたから、無茶をしない限り永続出来る。」と自信を見せている。そして十一月号の「編輯後記」で中谷に「雑誌も八号になると、段々同人の気持も融和し、各自勝手なことを云つても、その間に自ら相通する親和が流れているもので、それが今の僕には甚だ愉快である。」と書かせるまでになっている。

その後も、芳賀壇を中心に東大独文科の出身者と学生で昭和十年の春に創刊された同人雑誌『アカイエル』が十一年の六月に合流し、十二年の一月号では、萩原朔太郎、佐藤春夫、中河与一、番匠谷英一、三好達治、外村繁の六名の参加が発表されている。その号の「編輯後記」は亀井が書いているが、過去二年間を要約して、「第一に詩精神の昂揚と現代リアリズムの低俗さへの反抗」、「第二に東西古典の擁護その鮮明、即ち血統の樹立」、「第三に現代文化人のあらゆる偽装に対する告発と弾劾」をあげ、「互に独立せる精神をもちながら、文化の敵のために協力しあった」と述べている。然し、次の三月号（二月号は休刊）の「編輯後記」では、「三年間もつづけてきたのも、日本の現代文化に対し、内心深く決意するところがあったからで」、「この「覇気の存する限り、この雑誌はつゞけて行かねばならない。しかし、個人の小っぱな野心をみたま場所となったり、茶舌話に類した心境をもてあそぶ場所となったり、要するに現代文化への決意と責任を放棄

し、覇気を喪失してしまったあかつきには、即刻廃刊するにしくはないと思っている。我々は、意味のない雑誌を只習慣的に維持してゆく必要を認めぬ。」と書いている。世帯が大きくなり過ぎて、同人の結束という点から見れば、纏まりがつかなくなり始めたかとも見てもいいであらうし、中河等の加入によって、保田と亀井の間にあった考え方の相違がはっきり表面化して来たとも言える。

昭和十二年の六月三日から十一日まで、『報知新聞』の文化欄に「人民文庫・日本浪漫派討論会」が連載された。『人民文庫』から高見順、新田潤、平林彪吾、『日本浪漫派』から保田与重郎、亀井勝一郎、中谷孝雄の三名ずつが出席しての討論会である。『日本浪漫派』の唱える「日本的なもの」に対して『人民文庫』側が攻撃をかけるが、討論はすれ違って噛み合っていない。

昭和十三年の二月号で「発表が遅れたが」と断って、平林英子、若林つや、横田文子、真杉静枝の四人の同人参加が発表されている。これ(8)で同人は五十六名ということになる。

三

先ず、保田は一号に「川端康成論」を書く。芭蕉を「はてしもない麴麴に思いを凝した孤高のイロニーである」とし、川端康成を「古も美しい伝統の日本文学の古典の趣味の樹立者の一人であった」と捉える保田は、自分を「年少マルクス主義の狂奔の世代に長じて来た僕ら

『日本浪漫派』と『人民文庫』（河内光治）

は、しかもマルクス主義に我を忘れる日さえもち得なかった」とし、「現代の僕らの気持のうえでは、合理的というもののあこがれのままでためらっていると見るのが、一番近い見解のようである。」と説明して次のように言う。

初めより肯定した概念を一応否定してみる。この意識過剰者の過程の面白さにとらえられる人々とだけ、僕は作品をよみ、文学を語りたいときに思う。一番微細な対象に捉えられることである。たゞこゝではすでに肯定も否定もない、あるものは過程だけがもつニヒリスチックな表情だけである。それも亦一つの虚勢である。しかも公衆に示された虚勢ではなく、自己自身に示す虚勢である。果して彼らは、一般に復讐の復讐までも、その伎倆と共に了知している。しかもいくらか自己を偶像化した公衆を作ることからだけはまぬがれぬ。現代精神の示す不吉の一標本である。そしてそこには嘆きと憤りが育くまれる。こゝに登場するものは世間の群衆と、もに、己自らの蔵する群衆である。しかも嘆きと憤りこそ、近世ドイツに初めて開花したロマンティクの文学と哲学の一つの性格として連綿と流れる真のロマンチックなものであった。

ここには保田の立場が実に鮮明に現れている。創刊号のこの「川端康成論」は川端への共感に即して自分自身を語ったものであり、『日本浪漫派』を起こす保田の覚悟と決意を率直に表明している。三号の

「反進歩主義文学論」は、『日本浪漫派』には「方法がないとか、体系がないとか、理論がないとか」という進歩派からの攻撃に反撃を加えたものである。彼等の言うのは理論や思想などではない、「君らは、自分にわかる言葉でものを語り、自在を得たことばで語る方がいゝのだ。それこそ言葉を愛し、それはひいて大衆を愛する所以である。だがその大衆というのも一つの思想に過ぎない。文学者の場合まさに一つの思想である。」として、「ある意味で一つの理論と、一つの文学的時代の終焉を予言するものが僕らの浪漫派である。」と言い切っている。そして現在の浪漫派を前世紀の浪漫派と比較する。「新国家を築き、民族の自覚から出発した」のが前の浪漫派であるが、「今日の日本浪漫派にもその類想は近頃の世相の中で見出される。日本は今国家の再認識の日にあるからである。だが僕ら日本浪漫派を反動呼ばりして快とする世の君子人たちも、未だこの事情を云々していない」。そして、今日の浪漫派が前代の浪漫派と決定的に異なる点を次のように言う。

もし国家を自覚し、革命の渦中で個人を自覚したときの浪漫主義が先代のものならば、今日の人間は国家に対する社会の中に強いられている。しかもものつびきならぬ形で、この自覚の形はわが日本の若い若干の作家では未だ滅亡していないと僕は見る。

例によって、聊か明晰を欠く文章であるが、註釈すれば、国家に對立する社会という概念が、個人の上にのしかかっていること、即ち個

人における社会性と民族性との統一が現代の課題であるということであろう。昭和十年五月の時点で、文学の上での民族の問題を、国家再認識の状況で捉えているのである。保田の所論は、既に確立されていると言っているであろう。

この時期の保田の文章の中に頻出するのは「イロニー」という語である。『コギト』に載せた「広告」の中にも、「真理と誠実の侍女として存在するイロニーを今遂に用いねばならぬ。」と書かれてある。これは後年の保田が愛用した「悲願」とか「慟哭」という語と同じように感覚的主情的なもので、切迫した感情の状態を示しているものである。イロニーという語の概念について橋川文三は次のように説明している。⁽⁹⁾

それはドイツ・ロマン派の特異な自己批判形式——創作理論として展開したものであり、いわば頹廢と緊張の中間に、無限に自己決定を留保する心的態度のあらわれであった。一般的にいえば、ある種の政治的無能力状態におかれた中間層的智識層が多少ともに獲得する資質に属するものであって、現実的には道德的無責任と政治的逃避の心情を匂わせるものであった。

この概念が保田の中で肉体化された時、理論とか思想とかの持つ觀念性が先ず否定され、恣意的な主情性の絶対化という経過を採る。そして先の「広告」の言葉のように一種の求道的なものを志向するニュアンスを帯びる。このことから、彼の書くものは、飛躍的・断片的な

構成を持ち、言葉遣いに呪術的魔力を潜めるということになる。それをこの時期の保田の代表作である『文学界』の昭和十一年十月号に発表された「日本の橋」で見えてみよう。

「東海道の田子浦の近くを汽車が廻るとき、私は車窓から一つ小さな石の橋を見たことがある。」と書き出され、この「哀っぽい橋」とローマ人の橋が比較され、

まことに羅馬人は、むしろ築造橋の延長としての道をもっていた。彼らは荒野の中に道を作った人々であったが、日本の旅人は山野の道を歩いた。道を自然の中のものとした。そして道の終りに橋を作った。はしは道の終りでもあった。しかしその終りははるかな彼方へつながれる意味であった。

日本の言葉で、はしは端末を意味するか、仲介としての専ら舟を意味するかは、かつてから何人かの人々の間で云い争われて来た主題であった。橋も箸も梯も、すべてはしであるが、二つのものを結びつけるはしを平面の上のゆききとし、又同時に上下のゆききとすることはさして妥協の説ではない。

そして先ず、太古の諺の「神の神庫も樹梯のまゝに」という語から神話時代の橋が語られる。更に「古い万葉集に出てくる飛鳥川の石橋」、王朝時代の相聞歌を象徴する「菖葛の橋」、枕草子にひかれて「あさむづの橋」が語られ、「こゝで私はたゞ橋についての美学を云うまでである」と註釈がつく。

【日本浪漫派】と「人民文庫」（河内光治）

私はこゝで歴史を云うよりも、美を語りたいのである。日本の美がどういう形で橋にあらわれ、又橋によって考えられ、次にはあらわされたか、そういう一般の生成の美学の問題を、一等に哀れで悲しそうな日本のものから展いて、今日一番若々しい日本の人々に訴えたいのである。

そして三河の八つ橋、長柄橋から、人柱、橋姫の話も絡ませ、新羅の古都慶州の仏国寺の青雲橋白雲橋に至るまで、絢爛多彩に日本の橋が語り続けられる。歴史の断片が時代を超えて象嵌され、読者は保田美学の日本の血統という密室の中に閉じ込められる。終わりに名古屋熱田の町の裁断橋の青銅擬宝珠に残る「美しい銘文」が紹介される。

「小田原陣に豊臣秀吉に従って出陣戦没した堀尾金助という若武者の三十三回忌の供養のために、母が架けたという意味をかき誌した」短いものである。保田は、この母の「かなしみのあまりに」と書く心境に思いを致し、その「至醇と直截にあふれた文章」は「至上叡智をあらわしたものと感動する。保田節とでも言うべき幻想的な措辞の連続の中に、激情的な感懐が瀰漫して行くのである。この構成から用語までが、保田のイロニーそのものと言えるであろう。この終わりの部分は昭和十六年の三、四月号の『改造』に発表された小林秀雄の、子供の死を悼む母親の嘆きを除いて歴史に何が残るか、という「歴史と文学」の中の一節に符合している。

保田は四号以降も毎号評論を載せている。九月号（六号）の「文芸

の大衆化について」の中で、大衆について「僕らは大衆を己の中にもたねばならないと語る、それは己がその中に捷息している大衆が眼につかぬからでもない。同じ意識をもつ大衆のために文学するということは、自分は自分のために好きな文学をしているというと同じである。」と書いている。保田は大衆という言葉をよく使うが、それも飽くまで自己内部に即したものと捉えている。然しその自己内部の大衆という意識は、強いられと言っている社会性の側面を示すものであろう。

次の十月号（七号）の「主題の積極性について」⁽¹⁰⁾の中に、次のような言葉がある。

僕らが青春を喪失したということは、一つの歴史的な現象を云うまでである。青春の喪失とはい換えるとヒュ머니の喪失であり、未来を既存のヒュ머니で類推できぬ意味である。そのために僕は今日何かの形でデカデンツにしか興味をひかれな

い。

ここで保田の言う「デカデンツ」は、積極的なものであり、「すべての文学が依存していた」と書かれているから、一般的な現象としてのデカダンスではなく、例の「イロニー」と肉親的關係に立つものと解すればいい。つまり「デカデンツ」の中にさえ、保田は一種の求心性を追っているのである。そして、「青春を喪失した」という言葉は、昭和八年の五月号の『文芸春秋』に発表された小林秀雄の「故郷を失

った文学」の中の、「私達が故郷を失った文学を抱いた、青春を失った青年達」という言葉を想い起こさせる。青春とともに故郷をも失ったと闡明する小林は、西洋直輸入の近代文学の確立に夢を託すが、大和桜井に日本古来土着の故郷を確保する保田は、日本の血統の樹立を目指す。十一月号（八号）の「法隆寺修繕のことなど」の中では、「僕は御製を謹んで研究しつゝあるが、古くは万葉の帝室歌人たちを初め、中ごろの後鳥羽院や王朝の王女たち、さらに吉野の王子たちの家集を追々に研究し、一文芸の問題を縦貫したいと考えている。」と、「日本民族の純粹血統の所産芸術の一大根幹を論じること」が「日本人としての使命」だと言明している。これは保田のその後の道行きを正しく予言したものである。

昭和十一年には保田は三月号（十二号）から十一月号（十八号）まで「文芸時評」を連載している。その中では『人民文庫』、特に武田麟太郎への批判が随処に見られる。九月号（十六号）ではデカダン文学を取り上げ、「卑俗な俗物精神」による歪曲を攻撃し、そして、

別の方で、「人民文庫」という集りはたとえばデカダンということ、これは又あっけなく解釈して自分らの日常で論理的整合を試みようとした。これは文学——世界の文学にふれる素質もつ文学人の態度でない。彼らのやり方は、文学を利用するやり方である。

とその「くそリアリズム」を遣り玉にあげているし、十一月号には、

「たとえば醜惡と汚穢を描くことを唯一の使命と感じているらしい武田麟太郎の場合にしても」という言葉が見られる。これは保田に限られたものでなく、『日本浪漫派』に共通した要素である。

なお、三月号の中に奇妙な文章がある。この「文芸時評」では終わりに「時評廃止の論」と小見出しを付け、新聞雑誌のレビュー式時評があるから月々の創作欄が作られる、そのため第一級の作品が生まれないのだから時評を廃止しろと言う。この時の保田は精神状態が悪かったのか生理条件に何かあったのか、八つ当たり気味の乱暴な文章になっているが、「こんなはしたない文章などかいていて、何が文学である、何が批評である。」と自分にも喰ってかかり、次のような言葉を連ねる。

せめてもう少しゆとりあったなら、僕は一むきに日本の古典を語りたい。だがそれを語ることさえ許されていないのだ。民族の光栄を述べるためには、その報国の文章かくためには、日米末来戦でもかゝねばならぬ今日である。記紀万葉集のことなどいさゝかも述べられるか。心おじて遠慮がちに描いてさえ、なおどうなるかわかりもせぬ。こんな日本民族の悲劇をつくったものも、創作家と結託した時評家の罪である。創作欄を云々すると共に、世の識者は好例レビュー式時評をも排斥されるがよい。

この「好例レビュー式批評」は「文学を軽蔑し」、「文筆業者の擁護と文壇の防衛」を果たし、「文筆業の敵見方超越した仲間仁義をせい

【日本浪漫派】と「人民文庫」（河内光治）

一杯にもりたてただけである。」とし、「たゞ日本の新しい文学をどうするか、全くしんどいことを言ってやった。」と結んでいる。この三月号は昭和十一年二月二十六日印刷、三月一日発行であるから、当然この文章は二・二六事件以前に書かれている。二・二六事件から切迫したファシズムの脅威を感じ、中野重治は高名な「閏二月二十九日」を書き、「反論理的」と攻撃された小林秀雄が「赤心を吐露した」(11)「中野重治君へ」を書いたことは既に著明である。が、二・二六事件以前に、保田をこうも激させるものが果たしてあったのかどうか、それが何であったか、推測もできない。保田のこの文章の中で、文壇の馴れ合い的傾向が新しい文学を阻んでいるという主張は理解できるが、何故、記紀万葉集のことが書けないのか、況してや何故、日米末来戦を書かねばならないのか、その点についてこの文章だけでは到底理解が及ばない。保田の文章が悪文であることには今更驚かないが、これは余りにも意味不明なので後日のために書き留めた。

四

亀井勝一郎は東大で新人会に属し共産青年同盟員として三・一五事件で検挙され、二年半未決囚として獄中で過ごし、転向して昭和五年秋に保釈出獄した。文芸批評家として登場したのは、ナルプの機関誌『プロレタリア文学』の昭和七年六月号に「創作活動に於ける当面の諸問題」という公式主義的な評論を発表してからである。然し、同誌

十月号の「同志林房雄の近業について」では、「ぼくは文学に一生をかける」という林が九月号の『新潮』に書いた「作家として」の結論に、「然り／ 然り／ これは偉大な常識である。あらゆるよき作家がそれを自分の前に誓った。それ故にそれは芸術の発展のための糧となった。」と共感したのである。当然、ナルプの指導部から批判されることになる。小林多喜二は堀英之助の筆名で同誌十二月号に「右翼的偏向の諸問題」を書き、その中で亀井のことを「我々の正しい一般方針と右翼的との間の調停派的役割を果たしているようである。」と批判し、宮本顕治も野沢徹の筆名で『プロレタリア文化』の昭和八年一月号に書いた「政治と芸術・政治の優位性に関する問題」の中で、亀井のことを「右翼日和見主義の本質を隠蔽する調停派的役割を果たすことになったのである。」と結論した。「政治の優位性」という指導理論について行けず、亀井の文学的転向とでも言うべき魂の遍歴が始められることになる。

昭和九年二月二十二日のナルプの解体声明の直後、三月十八日に『現実』の第一号が出る。同人は、亀井・本庄等の旧作家同盟員を中心に保田等を加えた七名である。この「現実」の創刊号から第三号にわたって亀井は「文学における意志的情熱の相」を連載する。そして第三号の「政治と文学」と傍題される文章の中で、彼はこれまでのプロレタリア文学者としての自分を次のように分析する。⁽¹²⁾

もし私共がほんとうにこの国の現実に鋭い眼を放っている芸術

家であつたならば、芸術の欠陥を政治的経済的運動の欠陥にむすびつけて論議すべきであつたのだ。文学上の「政治主義」のみならず、実際の運動全体にみまざる観念的傾向をも大胆に一撃すべきであつたし、私共を日和見主義、調停派、敗北主義と酷烈に批判したその人の政治的地盤に直截に我らもまた批判のメスを振うべきであつたのだ。そのためにはその政治的地盤へ身を処すべきであつたろう。ところが実際は、「政治主義」を批判しつつ、私共は政治そのものから目をそむけてしまった。文学の領域内でのみ文学を解決しようとしていた。つまり私共は徹頭徹尾階級闘争の見物人にすぎなかつたのだ。日和見主義という言葉は単なるレッテルではなかつたのである。

このプロレタリア文学の敗北を政治的欠陥と結びつけ、更に小林多喜二の横死をも含めて文学的な自己内部の問題と受け止め、それをいかに立て直して行か、その時、亀井は保田と『日本浪漫派』を創刊したのである。

創刊号に亀井は「浪漫的自我の問題」を載せてこの問題を追究する。「この覚え書は「現代の浪漫的思惟」第三部をなすものである。第一部、第二部は「文学界」一月、二月号に連載した。」と末尾に註され、(未完)となっている。亀井は、「作家とは、無暴の夢に憑かれるものであり、不可能を可能にする夢に生涯をかけるものである。鵜の真似をする鳥であり、瓜のつるになすびをならせようとするもので

ある。人間としてそうなのだ。」と前提する。無論これは彼自身のことを言っている。処が、「現代の進歩的作家はこんなことを言わない。出来るところで創作するという。それが現実的な道であるという。」のが一般的である。そこで、

然し、自我検討が、自己を固定化させるための合理化に終るということは、さほど深刻な問題ではない。その状態にゴマ化されるほど現代の智識人は無良心ではないし、一応そこへ気付くものである。むしろより重大なことは、マルクス主義という現代の理想主義精神に挫折した人、乃至は挫折を感じた人々がいかなる方法によってその理想主義を再度救うかに在る、その場合に抬頭してくる自我の問題である。そしてこれこそ、現代智識階級人の中心的な問題とならねばならぬと思う。

と問題の焦点を明確に描き出す。そして、過ぎ去ったプロレタリア文学運動を再吟味する今、自分達が「政治の領域においてはポチ犬的存在でしかありえなかった」ことを認め、怒り、政治主義・公式主義に「尾を振って追従した「犠牲心」を反省しなければならぬとし、「君自身ポチ犬であることなしに、この理想をわがものとするのがいかにして可能か。」と問題を提起する。その答えが浪漫的自我であり、過去の一例としてニイチエの確立した超人的自我を挙げている。更にそのニイチエを『悲劇の哲学』の中で取り上げたシエストフを、「転向者中の転向者、真の転向者」、「より正確に云えば背教者の仮面をか

『日本浪漫派』と『人民文庫』（河内光治）

ぶった殉教者というパラドックスを演じようとして演じ損った男」と捉えている。

このシエストフについては三号と四号にわたって「生けるユダ（シエストフ論）」を連載する。

神、善、あるいは人類の未来を幸福にすると約束した学説から、完全に身をそむけた場合、人は何によって生きて行くことが出来るのか？ 不幸な社会生活を少しでもよりよくしようとする希望を完全になげうったとき、人は何によって自己の生命を保とうと欲するか？

という問い掛けから書き出されるこの論文は、「ありとあらゆる理想的なものを拒否し、しかも市民的日常性に埋没するをいさぎよしとしない」背教者の魂、運命を辿ったものである。言うまでもなく、それは現在の亀井にかかわる問題であった。だから亀井は、終わりの方で、「日本の現実に対する私の態度が問題なのだ」と書かざるを得なかったし、「シエストフの思想が私を昂奮せしめたものは、背教の意識でもなく悲劇の哲学でもない。実に、この冒険の意識であった。」と書くのである。亀井を冒険に駆り立てたものは彼の「意志的情熱」であり、その行きつこうとするところは政治に追従せぬ文学的自我的確立であるが、そこへの道は容易なことではない。不可能を可能にしようという情熱だけではどうにもならないのである。二号で亀井は「現代の浪漫的思惟」の一部として「奴隸なき希臘の国へ」という一

文を書き、ギリシャ人のように美を尊ぶ日本の国土を夢見、政治家と芸術家との差別のない理想国を想う。而もその国には、かつてのギリシャのように奴隷がいてはならない。この『現実』から『日本浪漫派』の初期の亀井には再生への決意と夢が溢れている。それが、保田のイロニーを刺戟したのであろう。

この後、亀井は九月に「死火山の夢」という題の詩を書いている。

「嘗て火を噴いた山は永久に火を忘れぬ」という句から始まるこの詩も、当時の亀井の無限の焦燥を現している。そして昭和十一年の一月号(十号)、二月号(十一号)に「ゲエテの第一章」と副題された「シユトウルム・ウント・ドウランク」⁽¹³⁾の一、二を発表する。

私がゲエテへ赴いたのは、崩れかゝった青春を山麓において癒そうと思ったからである。

と彼は二ヵ月後の四月号(十三号)の「青春の再建と没落」の中で書いている。山麓とは、「ゲエテは決して登山家ではなかった。彼はつねに山麓に休らう偉大な遊山家だった」ということである。前記に続いてこう書かれてある。

ゲエテは私にとって自然である。自然のごとく雄大で慈悲ぶかく、静謐の中に暴風をはらみ、無尽蔵に豊かで、些の人為的歪曲もなく、百花瞭乱^{マヤ}として時には退屈のあまり眠くなるほどである。一体、かくの如き健康に吾人は堪えうるのか。遠くはなれて憧憬している限り、その力に堪えうるかのように思われたが、い

ざ近づいてその一つ一つに触れてみると、結局かの健康は私を傷けるのみであった。

このエッセーは自我の再生という困難に挑戦し、戦い破れた亀井の絶望の呻きである。「没落者の道徳ということ」を熱心に考えた一時期があった。(中略)自殺から生への過渡には、何かの飛躍が、いのちの初夜があるに違いないのだ。その飛躍を索める義務を感じたけれども何も発見することが出来なかった。」とも書かれてある。そして、「青春が仮面でなく没落でないところの人間が現代に在るだろうか。」という悲痛な叫びで終わっている。

然し、亀井に一つの転機が来る。六月号(十四号)の「夜明け前」に就いてである。亀井は昭和七年九月号の『プロレタリア文学』に書いた「リアリズムについて」の中で「夜明け前」について書いているが、藤村を「日本の伝統を愛した作家であった」としながらも、その革命性の欠除を指摘する公式主義的な批評を展開している。処が、ここでは、彼は青山半蔵の生涯を追うという形式で手際よく問題を整理し、全体として「夜明け前」を書いた藤村に共感し、「この日本において、真実の黎明^{マヤ}かいかにして可能か。藤村はまず深い歴史的究明と、その歴史の中に生きた悲劇的な意志とをとおして、新しい動向をみきわめたいと願ったのであろう。それは充分な迫力をもって我々をうった。」と書くのである。この亀井は昭和十二年の四月号(二十二号)で林の『壮年』第一巻を讀める「『壮年』について」を書いた亀

井にまっすぐにつながって行く。意志的情熱の錯乱を経て、時勢論的求道家としての亀井が再生したのは、明治の精神に拠る日本主義者としてであった。

ゲーテについても「ゲエテ第二章」として「伊太利への旅」が八月号から五回にわたって書きつがれる。疾風怒濤時代を青春の午前、ワイマール時代を青春の午後として、イタリア旅行を「私がローマの土を踏んだ日から、第二の誕生日、真の再生が始まった」というゲーテの告白で終わらせる評論である。そこには、青春の錯乱から脱出した亀井の再生が重ねられている。ゲーテがイタリア旅行で再生したように亀井も大和奈良の日本の古代を志向する。彼が育ったのは函館であり、保田との相違は、「単に見解や理論の相違でなく、後天的な経験の相違でもなく、もともと根底に、父祖の血と故郷の伝統があった。」と昭和十二年一月号（二十号）の「東洋の希臘人」の中で書いている。「僕は、立派な寺院も絵画も彫刻もおよそ美の血統と名づくべき何ものもない北方の曠野に生れた。僕は吹雪の中で生れた。」が、保田の生まれ育った大和は、「あわれにも美しい王朝人の末裔がもの思わしげに歩いている静かな南国」であり、「奈良は日本のローマであった。」と想像する。「ゲエテ第三章」は「美しきヘレナ（希臘思慕・その古代性と近代性）」と題され、五月号（二十三号）、七月号（二十四号）と書かれるが、未完のまま亀井はその後殆ど執筆していない。そして昭和十二年の秋、『日本浪漫派』の編集から降りた亀井は、

「日本浪漫派」と「人民文庫」（河内光治）

初めて奈良に旅立って行く。

五

『人民文庫』は、武田麟太郎が独力で資金を用意し、自ら編集した雑誌である。同人制は採らず、執筆者グループが作られた。創刊にまつわるエピソードが高見順の『昭和文学盛衰史』二の第三章「ファシズムの波」の冒頭に書かれてあるが、昭和十年の「夏だったか、それとももう秋に入っていたか」の頃、武田が高見に『文学界』をよすから『日曆』に入れてくれと言いつ出した。自分の考えを「『文学界』で主張したって、はじまらないから、自分の主張の出せる雑誌がほしい」ということである。高見は『文学界』のヘゲモニーを林に奪われたことがその原因と見ている。武田の言う「自分の考え」の一つに「文芸懇話会」への反撥があったことも確かである。昭和九年十一月に林は再入獄するが、その時の要請で昭和十年一月号から武田に代わって小林が『文学界』の編集に当たる。十月に出獄して来た林と小林の間で同人改組が進められ、林・小林の主導権が確立される。そして「文芸懇話会」擁護と受けとられる発言をして中野から猛烈な攻撃を受ける。⁽¹⁴⁾而も林は創刊される前から『日本浪漫派』に参加すると言っているくらいであるから、武田と林が相容れなくなったことは容易に推察できることである。昭和十年秋の満年齢で、武田が三十一歳、高見が二十八歳、林が三十二歳である。

『現実』が本意なくも五号で廃刊せざるを得なくなった時、同人と執筆者の大半は『日本浪漫派』に参加した。そして残された本庄陸男等は昭和十一年三月に第二次『現実』を創刊するが、これも六月の四号で廃刊になる。この自分より不遇な旧作家同盟員に誌面を提供することも武田の意図の一つに入っていた。⁽¹⁵⁾武田は既に昭和九年の八月から『朝日新聞』に「銀座八丁」を、十年の八月から『都新聞』に「下界の眺め」を連載する流行作家であった。創刊とともに執筆グループに参加した細野孝二郎、湯浅克衛、平林彪吾等がこれに当たる。本庄は請われて創刊号から編集発行人となる。平林は昭和十年の『文芸』に「鶏飼いのコミュニスト」が懸賞当選しているが昭和十四年四月に敗血症のため三十七歳で亡くなっている。本庄も『人民文庫』の編集に疲れ、編集担当を昭和十二年九月号限りで降りるが、肺結核が進行して居り、遺作「石狩川」を未完のまま、昭和十四年七月に三十五歳で世を去る。

もう一つの執筆グループは『日暦』の同人である。『日暦』は荒木巍が呼びかけ、「昔からの仲間」だけの小人数でやろうということになった。気心の知れた仲間だけが集まって本気になって自分たちの「新しい道を開こう」、新しくやり直す気持で自分のほんとうに書いた小説を書くということ⁽¹⁶⁾で創刊された。「昔からの仲間」というのは、昭和三年三月に創刊され十月に四号で終刊した『大学左派』以来の仲間のことである。『大学左派』は東大内の同人誌七誌と戦闘的

分子の個人参加によって結成された「帝大雑誌連盟」が刊行した雑誌で、池田寿夫が編集発行人となり、高見、武田、新田潤、渋谷驍（町田純二）等が中心であった。『日暦』には七号（十年二月号）から連載された高見の「故旧忘れ得べき」が第一回の芥川賞候補になるなど、当初の意気込み通り若い作家の力作が次々に発表されている。その基本的な姿勢については、辻橋三郎は、高見、渋谷、田宮虎彦等の、保田、『日本浪漫派』、「文芸懇話会」に対しての痛烈な批判を取り上げ、当時の体制に「批判的、非協力」であったとし、全体の性格を「芸術的抵抗というバックボーンを中軸として、形成されていた」⁽¹⁷⁾と要約している。この『日暦』の同人は全員が個人参加という形で『人民文庫』の執筆グループに加わり、『日暦』は続けられる。然し二つの雑誌を続けるということは勤め人が半数以上であった『日暦』の同人の場合には負担が重く、昭和十一年五月までは約隔月刊ぐらいのペースで発行されていたのが、その後八月に十八号を出した後、十九号（十二年三月）、二十号（十一年七月）と間隔が開いて行く。それだけ『人民文庫』に力を割いていたということであろう。なお『日暦』は昭和十六年十月の二十一号で戦前の幕を閉じるが、戦後昭和二十六年九月に復刊一号が出された。

創刊号の「編輯後記」で武田は、創刊の事情と今後の方針について、

いつからか、こんな雑誌を出して見ようと云う気運が私たち仲

間に湧いた、云わば、今のところは徒党的な雑誌であるが、それでいいと思っている。外から原稿は貰わず、仲間だけのですました、後々までこの調子でやって行くかどうかは未だ解らない、唯、秋田、江口、青野氏には社会主義文学の三長老と云う意味で、若輩の私たちを助けて、勝手気儘なところを、毎月何頁か書いて頂くことにした。

と書いている。そして「別に資本とてなく私のけちな原稿料のうちから経費を支出しているのだから」と経済的基盤もはっきりさせている。売れ行きはよかったようで、五月号の「編輯后記」で武田は「意想外」の売れ行きで、「とに角現在日本の文芸雑誌のうちで最も多く読まれているということだけは断言出来た」と書いている。読者層は日本各地の「戦旗」の開拓した残りの「廿六七位の青年——壮年期の人達」⁽¹⁹⁾が中心で、智識階級とともに労働者層も含まれていたようである。

創刊一週年記念の昭和十二年三月号の巻頭に武田は「挨拶」を書き、

なんら金力の背景もなく、なんら権力の被護もなくと云う言葉を私たちはよく使って来ましたが、そこに日本文学の、と云うよりは広く文学の伝統があり、私たちは文字どおりそのなかに小説行動を生かそうと決意して来た。

とその基本姿勢を明らかにした上で、この一年間を次のように要約し

『日本浪漫派』と『人民文庫』（河内光治）

ている。

文芸懇話会の排撃、リアリズムの正統的發展、旺盛な散文化、つまり約言すれば文化の擁護と正しく高い小説の大衆化——私たちはこの目的に微力を尽して来ました。

『人民文庫』のスローガンは「野党的な散文精神」であった。創刊号の「編輯后記」の中で武田は「もう少し野党的な辛辣味や攻撃精神が出ればよかった。」とも書いているし、五月号の「編輯后記」でも「唯一の野党文学」と言っている。七月号では武田を除く執筆グループが集まった座談会というか放談会というか「若もの一席話」が組まれているが、その冒頭でも「散文精神」が論ぜられている。渋川は、「リアリズムの創作方法を小説について徹底的に実行することが散文精神の強化」だと言ひ、高見は、「小説というのは民主主義の子で、散文精神というのは文学における民主主義——民主主義の生んだ文学的精神だ」と言っている。十月号には「散文精神を訊く」という座談会が組まれている。徳田秋声、広津和郎を招いて、武田、高見、渋川、円地文子が話を聞く形で始められ、広津の大正十三年の「散文芸術の人生における位置」から話が進められる。この中で武田は西鶴について、

散文で書いたというより、僕はやっぱりはじめて散文精神を前面に押し出した——現実を何の感傷やベエルなしに光りのもとにさらし出したと思うね。

と語り、その流れが自然主義、プロレタリア文学と続き、「散文精神が発展してきたと云うことは、散文精神の主張と人間解放の気運、民主主義的な時代精神と密接な関係あることになりませんか。」と結論している。先の高見発言の中の民主主義とともに、この「民主主義的な時代精神」という言葉も何を意味しているか正確には理解しかねるが、当時のヒューマニズム、人間性の確保という風潮に関係していることは言えるだろう。そしてプロレタリア文学については、「散文精神の最も直接的な実行者であるべきに拘らず、イデオロギーの確立に急いであゝいうふうな理想主義的な甘い境地に降りていたと思う」と批判している。この理想主義的な甘い境地というのは、「政治の優位性」の下で「主題の積極性」を求めた指導部の方針を指したもので、庶民の直面している現実の中から主題を抜き出しそれをそのままの姿で描き出すことによって、面白くもあり、人間解放という社会性のある作品を創り出すことが出来るという考え方である。昭和七年六月号の『中央公論』に「日本三文オペラ」を発表し当時の指導部の方針から脱け出して以来の武田の持論である。然し、この平板素朴なリアリズムによる庶民の具体的生活の描写という手法は、逆に思想性という背骨が抜けて単なる風俗小説に墮する危険を持ち、庶民の現実が卑小な頽廃面で表される弱点を抱えていた。

然し、意識は仲々鮮明で、昭和十一年の、八、九、十月号には「日本に於ける社会主義文学の抬頭期を語る座談会」が大がかりに連載さ

れている。『種時く人』の創刊から『文芸戦線』発刊の頃までを、先の三長老を始め、小牧近江、金子洋文、佐々木孝丸、林房雄等の当事を呼んで縦横に語って貰ったもので、プロレタリア文学の出發時の問題点をもう一度検討し、果たせなかった可能性を探るという意図であった。昭和十二年の四月号では「若もの一席話」が「日本の浪漫派を訊す」という題で載せられ、その非論理性、貴族的高踏性、人民蔑視の傾向などが取り上げられている。これがきっかけとなって『報知新聞』の討論会が企画されたわけである。十一月号では宇野浩二を中心に、徳永直、窪川稲子を交じえて、武田、高見、本庄の後の編集担当者那珂孝平が、「散文的文学論」の座談会を行い、西鶴と明治以後の作家作品評を展開している。

『人民文庫』の人民という言葉には特別な意味がこめられていなかったようである。⁽²¹⁾然し、昭和十年に「人民戦線」という言葉がフランスから輸入されて一種の流行語になるとともに、『人民文庫』は人民戦線の文芸雑誌と見られるようになって行った。これは誤解と言うのではなく、広い意味で人民戦線的な動きの一つという意味では、『人民文庫』の性格を端的に表しているものと言ってよい。現に、昭和十一年の九月号には武田の署名で「国際文化擁護者作家協会書記局ジャン・リシャール・ブロック様」宛に、五月二十五日付の同氏の手紙に対する返書が載せられてあるが、その中には次の一節がある。

何よりも先ず、我々日本の進歩的著作家が一層広い範囲に於い

て結束し、協会の日本支部設立に於いて討議する必要があると思います。しかしその成功の為には依然として困難があります。即ち、目下の極めて微妙な政治情勢と、距離の問題です。

これで見れば、武田は人民戦線的な意識を明確に持っていたと言えると思う。

これに関連して『人民文庫』の編集方針の中で、読者との交流の重視と、「市井談義」欄の設置が目玉される。昭和十一年の七月号から「読者の頁」という投書欄が常設され、九月号からは新聞紙法による保証金を納めて、時事問題を含めた社会時評である「市井談義」欄が作られる。十二月号では「読者と生活と文学を語る」座談会が全国各地の読者代表を招いて行われ、その後「市井談義」にも読者の投書が載せられることになる。執筆グループによる「市井談義」も好評であったが、読者のは庶民の声の代表として生々しい報告が多く、異彩を放っている。一例を挙げれば、昭和十二年六月号には、「東京市電のサボ戦術成功」「明るみに出た京都伏見署の拷問事件」等、八月号には「農村の疾病率と死亡率」「北海道札幌市電の争議」「国民生活はどれだけ低下したか」等が載せられている。座談会も昭和十二年一月号の執筆グループの中の女性作家と平林たい子を囲んでの「働く女性は斯く視る」、五月号の各種の勤め人を招いての「市井の生活と文学を語る」、八月号の「勤労者の生活感想をぶちまける」等が組まれ、読者との交流が積極的に図られている。

『日本浪漫派』と『人民文庫』（河内光治）

昭和十一年十月二十五日の日曜日に新宿の喫茶店の別室で執筆グループによって開かれた「徳田秋声研究会」は無届けであったため淀橋署に解散を命ぜられ、出席者十六名が検挙され、左翼作家陣の大検挙として新聞に大きく報じられた。誤解とわかり、二十八日までには全員が釈放されたが、武田は「赤化活動に狂奔」⁽²²⁾とまで書かれたのである。

昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件から勃発した「支那事変」は、昭和六年九月の「満洲事変」以来の日本の侵略体制を一挙に本格的な戦争へと突入させたもので、言論統制が一段と厳しくなる。『人民文庫』の九月号は「市井談義」や創作の一部が対象となり発売禁止処分を受ける。そして「京都人民戦線事件」が起こる。平野謙の記述を借りれば、八月十三日『リアル』の同人四名が「共産主義の宣伝を意図するもの」として検挙され、その線から十一月に『世界文化』の五名、翌十三年六月には『学生評論』のメンバーが一斉に検挙された事件である。因に『世界文化』という誌名は同人の久野収の回想によれば、⁽²³⁾「そのころ顔を出し始めた『日本浪漫主義』に対する正面からの対抗というので選ばれました。『日本』に対して『世界』を出し『浪漫』に対して『文化』を出したわけです。」ということである。

昭和十二年の九月には内閣に情報部が設置され、十二月には中野重治、宮本百合子に対して執筆禁止の措置が取られた。十一月に「唯研事件」⁽²⁵⁾と呼ばれる唯物論研究会の検挙があり、「唯研の次は『人民文

庫』らしい⁽²⁶⁾という噂が立ち、『日曆』系の執筆グループの間に動揺が起こる。そこで箱根で執筆中の武田を高見等が訪ね相談すると、「ぞっとするくらい暗い顔」の武田が、結論として「廃刊しよう」と「低いが強く」言ったとある。

既に、『文学評論』は十二年の七月に廃刊させられ、発行元のナウカ社も解散させられている。十三年の一月には「独立作家クラブ」も解散させられた。『人民文庫』の廃刊も、これらの一連のものに繋がっていると見ていいであろう。

六

昭和十二年一月から佐藤春夫等とともに『日本浪漫派』に加わった中河与一は三月号に「民族文化主義」を載せ、ナチスの焚書さえ弁護する超国家主義者の正体を示しているが、この頃から亀井と組んでいた保田が、亀井から離れ、中河と結びついて行ったように思われる。十二年の八月号(二十五号)に「浪漫派の将来」という座談会が載せられている。保田、亀井、神保、中谷が出席し、芳賀が司会者であるが、保田と亀井がお互いの相違点を確かめ合うという形になっている。見方を変えれば、保田と意見を異にする亀井を、保田一派が糾問していると言ってもよい。例の「大衆」から問題が展開されている。亀井が「あるがまゝの大衆に対して、かくあれと望む大衆を僕が心に描くわけだね。」と発言したのに、

中谷 亀井の大衆というのは、もっとはっきりいえば、プロレタリア文学で言っていた大衆というものを、もう一度亀井式に考え直したものでしょう。

亀井 そうだ。つまりプロレタリア文学の言う意味の大衆というのは、党派なんだ、それは実にはっきりしている。(中略)それが消滅しました。全然ない時に、僕は、どうするか。自分の理想の民衆を自分の観念の中に描くより仕様がないうという結論が出て来たのだ。それと同時に、政治に依存し依托することはきっぱり拒否したい。寧ろ文学者自身の独創的なイメージとしての民衆というものはつきり持つて、その立場から政治批判でも何でもやって行かなければならんということを考えたのだ。(以下略)

保田 大衆が党派だということは、大衆という言葉が持っている本来の意味から考えてその通りだ。どんな場合でも党派を意味せん大衆はないからね。党派でなかったら、浮動した群衆だよ。

亀井 だから君の謂う群衆を大衆にする必要が出て来る。

保田 併し、我々作家とか詩人とかいう場合には、いつも党派とかもって緊密な血統まで持っている。

亀井の場合は、飽くまで自分の文学を信ずること、その上に立って大衆化Ⅱ体系化を図ろうとしているが、保田は、この後で「文学史には発展法則はない、連続した運動法則もない」と言っている一切の体系化を拒否している。保田はそれを亀井のドイツ的な西洋的な考え方と、

自分の日本的な東洋的な考え方の違いと見ている。

次の号では、同人の小説家を集めて「小説の問題」という座談会を組んでいるが、この方は保田を囲んで和氣藹藹という雰囲気である。そして同じ号の「文芸雑誌編輯方法総じて未し」というエッセーの中で保田は、「日本浪漫派の編輯方針を一ぺん転換してはどうか。」と書いている。既に、亀井と組んだ形での『日本浪漫派』に一つの限界を見ていたということであろう。

亀井は『日本浪漫派』を脱退していたようである。亀井が編集したのは昭和十二年の九月号（二十六号）が最後で、七月に応召して北支に出征した檀一雄のことから「編輯後記」を書いているが、「身体が丈夫なら従軍記者にでもなりたい」とか「せめて立派な雑誌をつくり文章報国で責をふせぎたい」とか時勢論者らしい発言を連ねているが、雑誌はこの後休刊して、昭和十三年一月号から外村が編集に当た

る。⁽²⁷⁾
緑川貢は次のように書いている。

保田亀井と並称された、このふたりの新鋭評論家の間に、いつか意識の疎隔が生じていた。たちまち、兩人の仲は割れ、やがて亀井の浪漫派脱退となるのだが、この間の機微は、これまで試みられたどの日本浪漫派論究にも、全くといってよいほど、触れられていない。第一、亀井の日本浪漫派脱退という、重要な項そのものが浪漫派同人の間にすら、確然と知られたものではなかった

『日本浪漫派』と『人民文庫』（河内光治）

のである。

しかし、この事件は、浪漫派解体の契機であった。いや、日本浪漫派は、いまでも解体してはいないのだから、「日本浪漫派」という同人雑誌が出なくなる契機であったというべきかも知れない。

亀井の脱退が一つの引き金であったろうが、廃刊の事情は熟した木の実が自然に地に落ちるのと同じことであつたと言えるだろう。保田も、「一種の世俗的な頹廢に陥るような気配のあつたところに、雑誌刊行の意欲もようやく低下していった」ので、「雑誌『日本浪漫派』は、すでにその形をかえる時だと判断した。」と回想している。⁽²⁸⁾これは亀井が昭和十二年の三月号（二十一号）に書いた霸気がなくなれば廃刊しようという「編輯後記」に照応している。

「文芸懇話会」は昭和十二年の七月に解散するが、翌日「新日本文化の会」が結成される。六月に設立された「帝国芸術院」と併せてその機能を二分したのである。そして十三年一月に機関誌『新日本』が創刊される。編集委員長は佐藤春夫で、編集委員は、林、中河、保田、芳賀、萩原、三好、浅野である。昭和十二年の九月には尾崎士郎と林房雄が、十二月には石川達三が中央公論社の特派員として従軍し、『中央公論』の三月号に発表された石川の「生きている兵隊」は発売禁止処分を受けた。保田も佐藤とともに大陸に渡り、五月十九日の「皇軍の徐州入城」を「北京の軍舎で」書き、「それから三月後に

上京し、文壇思想界の一変に驚いたと書いている。(29) 終刊号の「編輯後記」で外村は次号の内容を予告したりしているから、雑誌の廃刊は上京した保田の決断によるものと思われる。

雑誌『日本浪漫派』はこれで終わるが、日本浪漫派の文学運動は、続いている「コギト」、更に昭和十三年七月に創刊された『文芸文化』、昭和十四年八月に創刊された『文芸世紀』に拠って続けられる。『文芸文化』は斎藤清衛門下の蓮田善明、清水文雄等の国文学の雑誌で昭和十九年八月の七十号で終わる。『文芸世紀』は、中河、保田、神保、芳賀が中心で、昭和二十年二月の六十四号まで続けられる。なお亀井は、昭和十三年九月に『文学界』の同人に加わる。

註

- (1) 以下、紙誌名、論文名、引用文について、当用漢字のあるものは当用漢字を使用し、仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。
- (2) 高見順の「昭和文学盛衰史二」(文芸春秋新社、昭33・11)の第二章「あの死、この死」の項。
- (3) 平野謙「ひとつの反指定」(真善美社、昭23・7「平野謙戦後文芸評論」所収)
- (4) 「コギト」は昭和七年三月、保田与重郎等大阪高校出身者を中心に創刊された同人雑誌で、発行者は肥下恒夫であるが、編集の中心は保田であった。誌名はデカルトの「logio, ego sum」(われ思う、故にわれあり)から採られたと言われている。創刊号の「編輯後記」で保田は、「私たちは最も深く古典を愛する。私たちはこの国の省みられぬ古典を愛する。私たちは古典を殻として愛する。それから私たちは殻を破る意識を愛する。」とその独自の芸術的美学的立場を明らかにしている。同誌は以後昭和十九年四月まで、満十三年間続けられ百四十号をもって終わる。

- (5) 「昭和文学盛衰史二」に拠る。
- (6) 中谷孝雄「あの頃の思い出——回想の日本浪漫派——」(審美社、昭41・11「日本浪漫派研究」1号所収)
- (7) 林房雄「思い出と述懐」(雄松堂書店、昭47・2復刻版「日本浪漫派」別冊「日本浪漫派とはなにか」所収)
- (8) 前項所収の一覽表に拠る。
- (9) 橋川文三「イロニイと文体」(未来社、昭35・2「日本浪漫派批判序説」所収)
- (10) 目次では「主題の積極性に就て」となっている。
- (11) 平野謙「中野重治論」(昭15・8)。なおこの中野・小林論争は拙稿「私小説論」考(昭53・3「幾徳工業大学研究報告A-2」で取り上げている。
- (12) 「現実」未見のため、「亀井勝一郎全集第一巻」(講談社、昭46・12)所収の「文学における意志的情熱」に拠った。
- (13) 二の表題は「シュトゥルム・ウント・ドラング」になっている。
- (14) 「文学界」昭和十一年二月号の「同人座談会」の中で島木健作は、林と武田の間に「根本的に現在の懇話会というものに對する認識の相違があるな」と発言している。中野の攻撃については(11)項の拙稿参照。
- (15) 「文学界」昭和十一年三月号の「同人座談会」の中の武田の発言など。
- (16) 「昭和文学盛衰史二」第三章「ファシズムの波」の項。
- (17) 辻橋三郎「人民文庫の姿勢」(桜楓社、昭49・11「昭和文学ノート」所収)。この論文は著者が渋谷川、田宮虎彦に直接聞いた談話が傍証として援用されている。
- (18) 「人民文庫」昭和十一年十二月号の座談会「読者と生活と文学」の中の古沢元の発言。
- (19) 同じ座談会の中の読者の堂山岬三の発言。
- (20) もう一人佐藤(田村)俊子が出ているが、「編輯後記」で武田は「とび入り」を歓迎したと書いている。
- (21) 辻橋三郎「人民文庫」の姿勢」の中の田宮談話。
- (22) 「人民文庫」昭和十二年十二月号の「市井談義」欄の武田の「二〇・二五事件をめぐって」。

- (23) 平野謙『文学・昭和十年前後』(文芸春秋社、昭47・4)の『世界文化』のことなど」の項。「リアル」は昭和十年五月創刊、北川桃雄、田中忠雄等。
- 「世界文化」は昭和十年二月創刊、新村猛、真下信一、中井正一、久野収、武谷三男等。「学生評論」は昭和十一年五月創刊、小野義彦、永島孝雄、布施杜生等。それに春日庄次郎を中心とする「共産主義者団」も関係する。
- (24) 「文学的立場」編、勁草書房、昭51・10「文学・昭和十年代を聞く」の中の「『世界文化』での経験——久野収」の項。
- (25) 昭和七年十月、戸坂潤、三枝博音等で「非政治的団体」として設立されたもので、機関誌は『唯物論研究』。
- (26) 『昭和文学盛衰史』第二章。
- (27) 緑川貢「私の立場」(『日本浪漫派とはなにか』所収)。又、芳賀檀は「『日本浪漫派』——当時の追想」(同誌所収)の中で、「合理主義と功利主義は『日本浪漫派』をも犯蝕せずにはおかなかった。亀井勝一郎が私たちをすてて、はやくも圏外に去ったのがそのきつかけをつくった。」と書いている。
- (28) 保田与重郎「花の宴」のこと」(前項と同じ)。「花の宴」は『日本浪漫派』に連載された伊藤佐喜雄の長篇小説。
- (29) 保田与重郎「事変と文学者」(弘文堂書店、昭15・11「佐藤春夫」所収)。

昭和五十三年九月二十一日受理